特集 地域資源の再活用

地域振興に挑戦する人たちが、ここにもいる。地元伝来の資源を今日の生活スタイルに合わせてとらえ直し、新しい商品を生み出すことで地域に活力を呼び起こしている。今号は各地で埋もれていた資源を最大限に活用しながら、まちに元気を与えている事例を取り上げた。

取材・清水　高
山田清志
関根利子

埋もれていた「金沢箔」を食品や化粧品に活用

石川・金沢市　金箔

箔一

石川県では江戸時代に前田藩の文化育成・産業振興策により、輪島塗、九谷焼、金沢漆器など多くの伝統工芸技術が育ち、今日まで連綿と受け継がれている。金箔の製造技術もその一つ。幕藩体制の崩壊後、金沢は金箔の産地として全国一の地位をゆるぎないものにしたという。長年にわたり仏壇や織物、漆器類の装飾に使われてきたその技術で、現代社会に新しい流れをつくったのが箔一。伝統ある地域資源の用途を食品や化粧品にまで広げた。

九州新幹線、大手ホテルなど内装金箔張りでも活躍

平成23年春に九州新幹線鹿児島ルートの全線開通を予定するＪＲ九州は、ことし8月より新八代（熊本県）―鹿児島中央間で「つばめ新８００系」車輌の運行を始めた。客室の内装は、蒔絵や金箔などをふんだんに使い、落ち着きのある日本らしさを強調したもの。この車輌の内装金箔張りを手掛けた会社が、金沢の箔一だ。

金沢市森戸にある箔一本社「箔巧館」ショップを日に何度か見て回る浅野邦子会長。金沢箔の製造から箔を使った工芸品、日常品の製造販売まで手掛ける金沢唯一の会社を一代でつくった

浅野邦子会長はその完成した内装写真を一目見て「私の知らないうちに、こんないい仕事をいただいていたなんて。きれいなので乗ってみたい」と、営業部隊の努力に目を細めて喜んだ。というのも、箔一は浅野さんが昭和50年に家内工業の形で一人で起業、一代で築いた会社。長い間、製造、開発、経理とすべてにわたって孤高の陣頭指揮を執ってきた。営業も当然、浅野さんによるトップ営業が主体だった。

それが現在では現場の社員主体で会社が回るようになった。事業内容は金箔の製造とその加工品販売。ジャンルとしては漆器類、化粧品・あぶらとり紙、金箔を張ったザラメ砂糖など食品、建築物内装などだ。

ちなみに内装の金箔張りは大手ゼネコンなどの下請け加工の形式だが、東京でもホテルニューオータニ、ハイアットリージェンシー東京、ホテル日航東京などの施設には同社の技術が採用されてきた。